暁 鐘 の 音　NO.28

（ か ね の ね ）

秋田大学教職大学院 2023.5.23

今の自分があるのは

秋田県教育庁義務教育課管理主事　佐々木　勝利（平成 30 年 3 月修了）

寄稿にあたり、暁鐘の音 No.1 を読み返しました。当時の先生方、現職院生、ストマスの皆さんの顔や共に過ごした数々の景色が蘇り懐かしさを感じるとともに、あの頃の時間は本当に貴重なものだったと感じています。

さて、私は現在、県教育庁義務教育課の管理主事として勤務しています。行政職に就き、これまでと全く異なる環境や業務にプレッシャーや戸惑いを感じつつも、今は与えられた役割を全うすることが現場の子ども達や先生方、ひいては県全体の教育の未来につながるのだと自分に言い聞かせて奮闘しています。実際は、力不足を痛感し、心が折れそうな時が何度もあるのですが・・・。

ただ、そんな時に思い出すのは、教職大学院生時代につくば市で開催された学校組織マネジメント指導者養成研修でのことです。充実した研修内容はもちろんですが、一週間の研修を終えてセンターを出る際、バスの窓から目にした光景とその時に感じたことは今でも鮮明に思い出せます。写真がその場面です。苦しい時、立場は違えど教育に携わる人たちが、今この瞬間もそれぞれの立場で職責を果たすべく力を発揮されていると考えると、「全ては子どもたちのために」という言葉が頭に浮かんできて、元気と勇気が湧いてきます。

また話は変わりますが、私は幸運にも東京オリンピック２０２０に陸上競技の技術審判員として参加する機会を得ました。話があるまでは想像さえしていなかったことです。それは、教職大学院生になる際も同じでした。人生にはいつ、何が起こるか、チャンスが訪れるのか分かりません。様々なことに価値を見出し、主体的に学び続ける思いをもち続けていればいつしかチャンスが訪れ、何にも代え難い経験ができるのではないか。そう考えて日々過ごしていますが、これも教職大学院生時代の先生方や仲間から学んだことです。

私は、今の自分があるのは教職大学院での出会いや学びがあったからこそと思っています。改めて、このご縁に感謝するとともに、これからも、先生方や会員の皆さんのことを想像しながら頑張りたいと思います。皆様方のさらなるご活躍と秋田大学教職大学院の益々のご発展をお祈りしています。

校内研修の活性化をめざして

秋田大学教育文化学部附属小学校教諭　鈴木　聡（平成 31 年 3 月修了）

附属学校の使命の一つである研究推進に、今年度４月より研究主任として携わる機会をいただいております。私は平成 29 年度・30 年度の２年間、内地研修院として教職大学院で学ばせていただきました。カリキュラム・授業開発コースにおいて授業研究の進め方について学んだことが、現在の役割に直結していることを実感する毎日です。

さて、研究主任の役割の一つに校内研修の活性化が挙げられます。本校の校内研修の課題である、子どもの学びを深めるための授業参観と研究協議を充実することをめざしました。そのための具体的な取組として、学習者目線での子どもの姿の見取りと、それに基づいた研究協議を行いました。子どもの学びを見取る力を高めるために、子どもが「何をしたのか(do)」「何を考えたのか(think)「どう感じたのか（feel)」「何をしたかったのか（want)」の４つの視点で見取ることを重視しました。研究協議では、学習者の目線から見取った学習者の感情や考えに触れた話合いをめざしました。その理由は、子どもの学びの姿の具体から考えた背景に触れながら、互いの授業観や指導観を交流することを通して、授業のよさや授業改善の方向性を探ることをねらったからです。学習者の目線になって授業を参観することで、授業デザインや手立てが学習者の動機付けを促したり必要感につながったりしていたかという視点で、協議を深めることができたと感じています。

また、大学院科目「教育実践力の向上と秋田型協働研究システム」と連携し、11 月のオープン研修会では院生の皆さんにも学習者目線での子どもの姿の見取りと、それに基いた研究協議を体験していただきました。「子どもの姿から語る校内研究協議会であり役立った」「学習者目線で授業を見つめ、協議に生かしている部分が非常に参考になった」などの声が寄せられたことをありがたく思います。

結びになりますが教職大学院での学びやそこで得た人とのつながりが私の支えとなっており、ご指導いただいた先生方や共に学んだ現職院生・ストマスの皆さんに改めて感謝いたします。

【研究の方向性を共通理解するための
年度始めの提案授業（５月）】

【院生も参加したオープン研修会（１１月）】

成果発表を終えて

学校マネジメントコース
現職院生1年次　飯塚　正純

発表の前々日にパワーポイントの最終手直しを終え、前日に発表原稿が整い、当初はその原稿を片手に発表をするつもりであった。しかし、現職院生の仲間からパワーポイントの「発表者ツール」の効果的な使い方を教えてもらい、急きょ発表の仕方を変更した。こんなふうに準備がギリギリになったり、直前に変更点があったりすると、これまでの自分は多くの場合で、大なり小なりの失敗をしてきた。しかし、今回は違った。

私は「特別支援学校における地域資源を活用した授業の充実を図る方略の検討」という主題で実践研究に取り組んできた。地域資源を活用した学習活動に積極的に取り組みつつも、その意義や良さが十分に共有されていない感が所属校にはあったため、その原因を探り、改善を図っていきたいと考えた。研究の実践に当たっては、所属校の職員には多忙な中でアンケートに協力してもらったほか、アンケート結果の分析や授業検討、授業実践、さらにはインタビュー等でも貴重な時間をたくさんたくさん割いてもらった。また、インタビューデータの分析を行う際には、同じ院生室の仲間が図書館で専門書を一緒に探してくれた。そして、幾度となく見失いかけた研究の道筋を、指導担当の武田篤先生が根気強く一緒に考えてくださり、「これでいいんじゃないか。」と、いつも笑顔で背中を押してくださった。大学院生活において、この笑顔と優しい言葉からどれだけ力をもらってきたことか。

２月１８日。自分一人の力では絶対にこの日を迎えることはできなかった。たくさんの人の協力を得て支えられて迎えた成果発表の場。そんなことを考えながら、私は胸を張って発表を行うことができた。きっとほかの院生もそうだったのではないかと思う。間もなく現場に復帰することになるが、たくさんの人の協力によって得られた知見を大切に生かしていきたい。そして、実践をさらに深め、現場に還元していきたいと心から思う。

教職大学院での一年間を振り返って

カリキュラムマネジメントコース
現職院生１年次　鈴木　貴子

教職大学院の一年間は、貴重な学びを得たかけがえのない時間となりました。コロナ禍ではじめのうちはオンライン授業と奮闘しましたが、徐々に対面の授業も増え、大学の先生方と対面で学ぶことができる喜びとありがたさを実感しました。

教職大学院は「理論と実践の往還を通じて学校現場の課題を解決し、実践知の継承と創造に取り組む」実践的な学びの場となっています。内容は、学校の教育活動を支えている制度や法、令和の学校教育に必須である ICT の活用や働き方改革の推進、多様性への対応、個別最適な学びや協働的な学び、秋田型共同研究システム、学校組織の分析や改善のためのマネジメント等、多岐にわたりました。それらの学びは同時に自身のこれまでの実践やものの捉え方を問い直す作業ともなりました。新たな気付きを得たり衝撃を受けたりするたびに、それまでの自分はいかに狭い視野で物事を見て判断してきていたのかと、内省を繰り返したものです。さらに、疑問や考えを出し合い話し合いを重ね、互いの教育観の交流から新たな視点を得るたびに「自分はなぜこう考えるのか」と自身の学びを捉え直す省察の経験をしました。このダブルループ的思考や省察の仕方の獲得は、これからの自身の大きな財産になると感じています。

授業や院生室でのストマスとの語らいも大きな学びの機会でした。現職院生が自身の体験や経験を惜しむことなく伝え、ストマスがそれを受け、さらに問い返すことで話題が深まるという、とても濃い時間となりました。学校現場は、教員をめざし力強くまっすぐに伸びようとするストマスたちが力を十分に発揮できる場でありたいと強く感じました。

これまでご指導いただいた先生方、共に学んだ現職院生. ストマスの皆さんとの出会いには感謝しかありません。本当にありがとうございました。

教師力高度化フォーラムの講演を通じて

カリキュラムマネジメントコース
現職院生１年次　菊池　高之

第14回あきたの教師力高度化フォーラムでは、令和の日本型学校教育の構築「“発達障害の今”―新たな支援の展開に向けて―」というテーマのもと、秋田県立医療療育センターの渡部泰弘氏による講演が行われた。演題は「発達障害とその周辺　―医療の現場から―」ということで、教育ではなく医療の視点から発達障害について知る機会となった。自閉症スペクトラムという言葉は、ここ数年で深く知られるようになるとともに、教育現場ではその教育的配慮や支援の在り方が課題となっているケースも少なくない。私の所属は特別支援学校ということもあり、自閉症スペクトラム概念においては、どちらかというと「山のてっぺん」に位置する児童生徒と関わることが多かったが、今回の講演では「山のすそ野」に位置する児童生徒についての話があり、自閉症の診断基準以下ではあるものの、二次障害等により社会適応が難しい児童生徒の現状について深く知ることがで

きた。

今回の講演から、特別支援教育に携わる者として「障害」という言葉を捉え直すことの重要さを改めて認識することができた。令和３年１月 中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、障害については「社会モデル」の考え方を踏まえる必要があることが述べられている。基本的に「関係性の問題」とされている自閉症スペクトラムについては、本人の困っていることやニーズから、周囲の環境やサポートを変化させていくことが重要であると感じた。「〇〇障害」などの診断の有無に捉われずに児童生徒一人一人を見つめ、特性があっても不適応なく過ごせるような合理的配慮が教育現場では必要であるとともに、医療・保護者との情報共有にも努めていきたいと強く感じた。

教職大学院での２年間

カリキュラム・授業開発コース
阿部　倫巳

岩手大学での４年間の学部時代を終え、正直特にこれといったモチベーションもなく秋田大学教職大学院に入学した一昨年の春でしたが、自分でいうのもなんですが人として大きく成長できた２年間だったなと思います。自分として力を入れたのは何といっても研究です。学部時代は教育にあまり関係のない研究を行ったもので、授業実践の研究なんてものはやり方すら一切わからず、手探りで進んでいる状態でした。ですが自分なりに勉強し、主担当の先生をはじめご指導いただいた様々な先生方とインターンシップ校の子どもたちに協力していただいた成果を報告書として残すことができました。また普段の授業やフォーラムを通して ICT 機器に関わる機会が多く、元々得意ではありましたが、より一層力をつけることができたなと感じています。こうした機会をたくさんいただいた教授の先生方、そして ICT 機器のことについてたくさん教えてくださったストマスの先輩方にはとても感謝しております。そして何より、普段の院生生活で共に研究に打ち込み、時には互いの悩みを相談したストマスの同期、頼ってくれる後輩、実際の教育現場での話や経験を隠すことなく伝えてくださった現職の先生方の存在は私にとって楽しく充実した時間でした。こう思い返してみると、コロナ禍で人と人との関わりが希薄になっているなんて言われていますが、私の院生生活は様々な人に支えられてきたのだなとしみじみ思います。今度は自分自身が誰かの支えになれるように、そしてこれまで関わった人たちに恩を返せるように。微力ながらではありますが秋田の地で教員として頑張っていきたいと思います。これまでのすべての出会いに感謝。

退職される先生方からのメッセージ

忘れられないことば

教職実践専攻（教職大学院）
教授　武田　篤

「愛だけでは、障害のある子は救えない。」

これは学生時代の恩師の言葉です。40 年以上たった今も、なぜかこの言葉は私の脳裏から離れません。学生時代、私は恩師のもとで視覚の基礎メカニズムを解明するために、くる日もくる日もタキストスコープ（視覚刺激を瞬時に呈示する装置）をのぞき込み、誘発電位（脳波）をとる実験に参加していました。そんなある日ふと私の中で、「こんなことをしていて、本当に障害のある子どもたちの支援に役立つのだろうか？」という疑問がよぎりました。意を決して恩師に疑問をぶつけると、冒頭の言葉が返ってきたのでした。

その後私は、臨床や実践に密着した教室に移り、臨床の現場で働くことになりました。しかし、働きはじめてすぐに熱意や努力だけではだけではどうしようもない現実に直面しました。同時にそのとき初めて基礎研究の重要性というものを知りました。私は基礎研究に戻ることはありませんでしたが、この言葉を支えに、臨床活動を行い、少しでも知見を積み重ねるという道をこれまで歩んできました。

「愛だけでは、障害のある子は救えない。」という言葉はこれからも私の中から消えることはないでしょう。蛇足ですが、この言葉の前には当然ながら「愛がなければ、障害のある子は救えない。でも、」という意味が込められていることはもちろんです。大学を去るにあたり、このメッセージを学生の皆さんへバトンタッチします。

退任にあたって

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　林　信太郎

いよいよ私も退任というタイミングでたいへんな事件が起きました。

人工知能が突然賢くなったのです。ついこの間まで、人工知能は 1 歳児程度の知能しかなく、「猫が認識できた」などと騒ぎになっていたのです。驚いたことに今年になって大学1年生くらいまで成長してしまったのですね。しかも、人工知能なので、知識の幅はおそろしく広い。なんでも知っている（さすがに地質学はまだ知らないですが）。そのうち、ChatGTP 丸写しのレポートなど出てきそうですね。実際私が、授業のリフレクションで出題している問題を解かせると、ぎりぎり合格くらいの答案が出てくるのです。丸写しは不正行為ですが、それを検出する手段がありません。困った。来年からの授業をどうやって運営しましょう…。

でも、よく考えると、私はあと１ヶ月で退任なのです。もう大学の授業をしなくても良いのですね。したがって、授業で人工知能に悩まされることもない。いやあ、とても幸せ。

教職大学院の院生の皆さんにお話ししておきたいことが二つあります。第一に学校の先生という職業は人工知能にとって変わられる可能性が非常に少ない職業です。ぜひ、教員目指してがんばってください。仕事を失いリストラされる心配は非常に少ないと思います。大学の教員はあぶないですけれど。第二に子どもたちは、人工知能を使いこなせるかどうかが、将来問われることになるでしょう。それ次第で子どもたちの人生が変わってしまうでしょう。ぜひ、人工知能を使いこなせる知恵を子どもたちにつけさせていただければと思います。

人工知能はたいへん便利な道具です。教員になるみなさんも、人工知能を使いこなせると効率よく仕事ができるようになると思います。すこしでも、ワークライフバランスをとりもどせるように、ぜひ活用してください。オリジナリティの必要のない、どうでもいいような文章ならば、人工知能に書かせてしまいましょう。

では、みなさんのこれからの人生が明るく、豊かで、充実したものになりますことを祈念してご挨拶とさせていただきます。

修了生からのメッセージ

～現職院生～

今井　彩

教職大学院では、これまでの実践と照らし合わせながら理論について学んだことで、より広い視点で教育の在り方を考えることができました。また、ご教授くださった先生方をはじめ、共に大学院生活を過ごした仲間のおかげで、充実した２年間を過ごすことができました。４月からは通信制大学院後期博士課程へと進学します。自分の研究を通して、より多くの方に貢献し、学んだ責任を果たしていけるようにしたいです。２年間ありがとうございました。

大塚　邦子

教職大学院での学びは、私の教師としての価値観を広げてくれただけでなく、自分自身のこれからの生き方そのものを考える良い機会であったと思います。小・中学校での教員生活を送っていた私にとって、特別支援教育や高校の先生方の意見を聞くことや、若く意欲あるストマスの方と交流できたこと、そして大学院の先生方の熱意ある指導に触れたことは、何もかもが新鮮で輝いたものでした。すべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。

石井　志徳

教職大学院で学ぶ機会を得られたことは、自分の教員人生において、貴重な財産となりました。その大学院での学びが充実したものになったのは、大学院の先生方をはじめ、現職院生のみなさん、ストマスのみなさんとの出会いのおかげです。この場を借りて厚くお礼申し上げます。大学院での出会いと学びを糧に、秋田県の高校教育の充実・発展のために、微力ながら尽くしていきます。

飯塚　正純

大学院生活を振り返ると、次から次へと課されるレポートや、思うように進まない研究に頭を抱える日々の連続でした。今思えばこの苦悩にこそ、ここに来た価値が詰まっていたのだと思います。修了を目前にした胸中は、晴れ晴れとした気持ちと多くの貴重な学び、そして、校種や世代を越えた仲間と切磋琢磨し合った日々の思い出に満ちています。教職大学院での学び、経験、人とのつながりをこれからの教職人生の糧として、現場でも一層精進していきます。

菊池　高之

現職の中では最も教職経験が少ないということもあり、４～５月は授業についていくことが難しく落ち込んだこともありました。それでも、「学友」の９名や先生方に支えられ、振り返るととても濃く、有意義な一年間を過ごすことができました。ありがとうございました。

小林　正明

院生室・授業・研究、貴重な出会いに感謝です。院生室では、身の回りのことから、授業・研究に至るまで、すべてにおいて、いろいろなヒントをいただきました。院生室では、学部卒２年次の浅野さん・平塚さんが、生活面でも、学習面でも、前向きな雰囲気をつくってくれたおかげで、ストマス１年次の武石さん・山田さんも、現職２年次の今井さんも、佐々木さん・飯塚さん・小林の現職１年次も、みんな忙しくてもにこにこ学び合うことができました。ありがとうございました。

嵯峨　静人

「よく学び、よく遊べ」をモットーに充実した１年間となりました。「遊び」では特に１８百名山を登攀したことが、よき思い出となりました。「学び」では、秋田の教育を牽引する優れた教授陣の下、多くの知識や管理職として「現場でどのように対応するのか」、「この場面で何を話すべきか」ということを学ぶことができました。また、講義におけるストマスの活躍ぶりを見て、私自身大いに刺激を受けましたし、現職院生の方々とのつながりは、心の礎として、これからの私を鼓舞してくれることと思います。ご指導、支援してくださった全ての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

菅原　渉

秋田大学教育文化学部には、長年大事にされている「学貴日新」という言葉があります。1930 年に故内藤湖南博士から、母校である秋田県師範学校に贈られたものだそうです。「人の子の師たらんと志す者はまず以て学問的研鑽と創造の業にいそしむ者でなければならないという、博士の信念を吐露された後輩への遺訓であると思う。」とかつての教育学部長工藤綏夫先生は記しています。この「学貴日新」という言葉のもつ意味は、「新たな教師の学びの姿」で求められるこれからの教師像と重なります。私は、この「学貴日新」の精神と大学院で学んだことを常に心に留め、常に学び続ける姿勢で歩んでいきたいと思います。また、大学院での学びを支えてくださった先生方、ストマス・6 年一貫の皆さん、現職の仲間たちには、本当にお世話になりました。皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

鈴木　貴子

教職大学院で学んだ一年間は、一言でいえば刺激的で新たな発見にあふれる毎日でした。たくさんの方との出会いの中で、「自分」を見つめ直すことが度々ありました。ここでの学びを生かし、今後も学び続ける教師でありたいと思います。丁寧に指導してくださった教職大学院の先生方、共に学んだ現職院生やストマスの皆さん、かかわってくださった全ての皆様に心から感謝いたします。

高橋　華子

様々な講義の中で、時には現職院生のみ、時には学部卒院生とともに協議をすることで、自身の実践を振り返る１年になりました。また、講義の内容について院生部屋で語り合うことで学びが深まりました。対話やリフレクションの大切さを生徒目線で実感できたことも大きな収穫です。御指導くださった先生方はじめ、院生のみなさん、本当にありがとうございました。大学で学んだ理論を学校での実践につなげていきたいと思います。

佐々木　公

この１年間、教育に関する専門的な理論に加え、リーダーシップや法規、インクルーシブ、ＩＣＴ等々、幅広い学びを経験することができました。また、教職実践専攻以外の先生方からも学びの多い魅力的なお話をたくさんうかがうことができました。今後は、これまでに得た知見を現場でいかしていけるよう努めます。そして、同期の現職院生の皆さん、ストマスの皆さんとの協議や日常の会話は自分自身の力にもなり、大切な思い出にもなりました。1 年間という短い時間でしたが、本当にありがとうございました。

渡部　和朝

教職大学院の一番のよさは「世代を超えた学び」ではないでしょうか。専門性を有した大学院の先生方や時代を担う学部卒院生、そして校種の違う現職院生と率直に意見を交わすことで、今後の進むべき道が見えてきました。また、学んだ理論や気付きは、節目節目での大きな支えとなると思います。これまで支えてくださった全ての皆様に感謝します。ありがとうございました。

～学部卒院生～

平塚　達也

軽い気持ちで門を叩いた大学院でしたが、この２年間は言葉で表せないほど充実しており、私の人生でこれから目指していく場所を明確にしてくれました。秋田大学教職大学院を選んで本当によかったと感じます。この大学院で学んだことは、揺るぎない自身の強みとして、今後の人生で生かしていきたいと思います。ご指導をしてくださった大学教員の皆様、教師としての姿を学ばせていただいた現職院生の皆様、苦楽を共にしながら学んだストマスのみんな、大学院で関わった全ての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

浅野　匡平

18 年間生きてきた茨城よりも、秋田に愛着を持ってしまったらしく、荷物が整理されて広く見える自分の部屋に、寂しさを覚えています。何度、先生方に「浅野さんみたいな面白い（変わった）人がいてくれたら秋田の学校も明るくなるから」と誘われても、「早く秋田を出たいっす」と言い続けていた、この私が。自分でも信じられないことが起こっていますが、私も教育に携わる身。過去の自分の発言には、責任を持たなければなりません。さいたまでの暮らし、楽しみ～。

阿部　倫己

学部時代を過ごした岩手大学から、なんの因果か秋田大学の教職大学院に入学し、あれよあれよという間に卒業を迎えました。それほど濃密で充実した大学院生活だったなと感じております。大学院で得られたものは専修免許だけではありません。研究に打ち込んだ経験、教育現場の経験、様々な人とのつながり…、多くのものを得ました。この経験を胸に、そしてこれまで関わったすべての人に感謝を込めて、秋田の小学校で力いっぱいがんばります。

佐々木　健真

教職大学院では教職実践インターンシップや研修旅行など、学部では経験することがなかった多くの経験ができました。これらすべての経験が自分の成長に直結したと感じる、楽しく充実した２年間でした。特に２年生で行ったインターンシップは公立中学校でほぼ１年間を通して実習を行い、教員の一員として授業だけでなく様々な行事にも参加し、学校現場を経験することができた貴重な時間であったと感じています。教職大学院で過ごした２年間で素晴らしい仲間たちと先生方に出会うことができました。大学院内外でできた多くのつながりを今後も大切にしながら教員として頑張ります。本当にありがとうございました。

４月の行事

４月　３日（月）　現職院生ガイダンス
４月　５日（水）　入学式
４月　６日（木）　新入生ガイダンス
４月　７日（金）　授業開始
４月１１日（火）　研究倫理研修